１５歳の初恋

ホワイトピンク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１５歳の初恋

【Ｎコード】
Ｎ１２７４Ｌ

【作者名】
ホワイトピンク

【あらすじ】
中学３年生まで「恋」をしたことがなかった若菜と、３年間も若菜のことを想い続けていた渉の恋愛小説。
ちょっぴり青春な１５歳の恋のものがたりです。
短いのですぐ読めちゃいます。
ドキドキしてみませんか？

若菜の想い

中学３年生の私は、今日も図書委員の仕事をこなす。
昔から本が好きな私はこれで中学校の３年間、毎年連続で図書委員をやっている。
おかげで図書室の本はほとんど読破させてもらった。
私の当番は毎週木曜日の昼休みと放課後。
担当はカウンターでカードにハンコを押したり、整理したり。
まぁそんな地味な仕事だが、これが案外楽しい。
ちなみに今は放課後。
あと１０分くらいしたら閉館かな。
そんなことを考えていたら、１年生の女の子が私に本を差し出した。
「あの、これ借ります。」
「はい。期限守ってね。」
私はそう言い、カードにハンコを押す。
するとその女の子はちらりと私の顔を見て、すたすたとドアを開けて図書室を出て行った。
しばらくして、
「おい若菜～。そこの机の上にある本持ってきてー」
もう一人の図書委員である、渉が言った。
渉も３年間連続で図書委員をやってきた私の良き相棒だ。
私は左から３番目の机の上にある推理小説を確認すると言った。
「うん、分かったーってか図書室でそんな大声出さないの！」
「へへっ。ワリィ。」
渉の姿は本棚で見えないが、きっと反省してる顔なんかしていないのだろう。
まったく。１年生の頃から何も変わってないんだから。
私はそうつぶやいて本を手にした。
「はい。どうぞ渉さま。」

私は本棚の前に立って本を並び替えている渉に本を渡した。
「サンキュ。あ。」
「なに？」
「ありがとう。」
「……どういたしまして。」
私は急に改まって言われたことに戸惑いつつも、おどけたようにニコリと笑ってカウンターに戻った。
渉は顔も良いし、性格も優しいから、学年の中ではわりとモテる方だ。
だが、告白を一度もオッケーしたことはない。
「好きな人がいるから。」
それが渉の言い分だった。
誰だか、興味本位で少し気になる。
だけど渉はその話をすると口をとがらせて怒ってしまうから、あまり聞けない。
ほら、いつもは優しいけどマジギレすると怖い男子って、いるじゃん？
まぁ、私には関係ないんだけどね。
私は今までの人生の中で「恋」というものをしたことが無い。
一体それがどういうものなのか想像がつかないし。
男子の姿を見てトキメくことよりも、一人で本を読んでいる方が幸せだと思うのになぁ。
と、本気でそう思っている。

渉の恋

俺は若菜に手渡された本を棚にしまった。
くそ・・・・・。
俺は思う。
せっかく2人きりで図書室にいられるのに。
なのにどうして俺は若菜になにも言えないのだろう。
「好きだ」
たった3文字なのに。
たった3文字で3年間の想いが伝わるのに。
若菜に告白できるのに。
なのに俺は今日も本棚の整理をするふりをして若菜を盗み見する。
可愛い。抱きしめたい。
俺はそう思ってしまった自分が恥ずかしくなり、顔を手で覆った。
こんなことを1年生の始めの頃からずっと続けている。
その間、俺はいろんなことを知って、いろんなことを学んで、
でも若菜への気持ちは変わらない。
初めて図書委員会の顔合わせで若菜を見てから、ずっと、俺は若菜と毎週木曜日に、図書室で若菜と時間を過ごした。
多分、この学校の男子で、一番若菜とすごした時間が多いのは、俺だと思う。
ある意味、自慢だが、だからといって俺はなにもすることができなかったのだから、意味がない。
俺は頬をパンパンとたたき、立ち上がった。
「若菜！俺、そろそろ部活！」
本棚で顔が見えない分、俺は元気な声で言った。
「うん。あとは鍵かけとくから行って良いよ。」
「いや、俺が鍵かけるから一緒に下まで行こうぜ。」
「・・・うん。別にいいけど。」

俺は今日こそ若菜に告白すると決め、手にかいた汗を制服のズボンでふく。
そしてバスケ部のユニフォームが入った重い鞄を肩に掛けて、カウンターの前に立った。
俺にいきなり前に立たれ、「ん？」と、とまどって俺を見つめる若菜。
若菜に上目遣いで見つめられ、俺は興奮してなにも言えなくなってしまった。
「なに？」
若菜は言った。
しかし俺は「いや、立ってみただけ」と訳の分からないことを口にして図書室を出た。
ドア越しに俺は言う。
「早く出ないと鍵しめっぞ～」
若菜の顔が見えない所だと、こんなに堂々と話せるのに、顔を見た途端に胸の鼓動が激しくなって息が苦しくなるのはなぜだろう。
「待ってよぉ～」
若菜はそんな甘えるような可愛い声で俺に応答し、すると俺は涙が出る程嬉しくなる。
俺ちょっとヤバいのかな。
そんなことを思っている間に、若菜が廊下にでてきた。
俺はカチャカチャと鍵を閉めて、若菜は『開館中』の札を裏返しにして歩き出す。
俺の後ろにてちてちとついてくる若菜はものすごく可愛くて、俺はまた抱きしめたい衝動を押さえた。
「ねぇ、渉？？」
「ん？」
「下駄箱、あっち。」
「あ。」
俺は３年昇降口と正反対の方向へ歩いていた。

若菜があきれたように笑って言う。
「もう。馬鹿だなぁ。考え事？」
「……。」
ひょっとしたら今、絶好のチャンスなんじゃないのか？
『お前のことを考えてた』それで告白完了じゃないのかな？
そしたら、そしたら、１０００００万分の１の確率で若菜が『私も、好き』なんて言っちゃって、俺の人生ハッピーエンドー！みたいな。
しかし俺はそんなチャンスをことごとく無駄にしてしまった。
結局なにも言えずに無言で歩き出してしまったのだ。
くそっ。
俺！本当馬鹿！
俺は自分の馬鹿さ加減にあきれつつも、下駄箱のふたを開けた。
すると、ポトリと封筒が落ちる。
クラスメイトの女子の名前が書かれたその封筒は、ほぼ確実にラブレター。
俺もこんな風に告白できたら、なぁ。
俺はその女子を尊敬はするが、オッケーするつもりはない。
だって俺の好きな人は若菜だから。
そう思いながら無造作に靴を履き、若菜のもとへ走った。
「渉、背伸びたねぇ。」
体育館への渡り廊下、無言で歩いていた俺に若菜は言った。
「万年チビのお前に言われても嬉しくネェよ。」
俺は照れ隠しでついそんなことを言ってしまう。
若菜は背が低く、丁度俺の胸くらいの身長しかない。
そんなところも可愛いのだが。
「いじわる。」
若菜はそう言って頬を膨らませた。
そんな表情が可愛くて、俺はますますこの女を好きになってしまう。
『お前、可愛い。好きだ。大好きだ。』

喉の奥まで来ているこの言葉を吐き出すのに、あとどれくらいの時間がいるのだろう。
俺は結局今日も告白をすることができなかった。
俺は体育館へ入り、若菜は武道場へ入った。
若菜は女子剣道部に所属している。
しかし身長が低いせいか、運動神経が無いせいか、部員の中では一番ヘタだそうだ。
まぁあいつは道義を着て竹刀を持っている姿よりも本を読んでいる姿の方が似合うしな。
どっちにしろ最高に可愛いけど。
俺は若菜のことだけを考えて、そして「うぉおおー」と雄叫びをあげながら体育館の端から端へと、ダメもとでシュートを放つ。
このシュートが入ったら告白しよう。絶対に。
入ったら、両想いだ！！！！
まぁ、入るわけないか。
そんなことを思いながら、入れ！という期待でボールの行方を追う。
すると、パサっ。という音と共にボールがきれいにネットの中に入った。
おっしゃ。入った。
女子バスケット部の方から歓声が来て、俺は気分が良くなって満面の笑みでピースをした。
そしてさらに強まる歓声を背に、俺は走り出した。
ヤバい。
今日なら行けるかも。
俺は少しの期待を胸に武道場のドアを開けた。

鈍感な若菜

「はぁ～い。じゃあ休憩ね」
部長の声で私は息を切らしながら面をはずした。
「疲れたぁーーー。」
思わずそう叫んでその場に座り込む。
すると女子剣道部の部長が私の隣に座った。
「このくらいで疲れたとかいわないの。もう。若菜は絶対文化部向きでしょ。」
「・・・でも運動部に入って体力付けたかったから・・・」
「はい、はい。あ、若菜、次の試合の団体戦、中堅で出させてあげるから、覚悟しときなさいよ。」
「・・・・・・・・ふぇ？」
「もう！感謝しなさい。3年も剣道やってきて1回も試合出てないなんて可哀想すぎるからね。それに若菜最近すっごく上手くなってるから。大丈夫。頑張れ！」
そういうと部長は立ち上がって他の部員に話しかけにいってしまった。
嘘。ヤバい。
団体戦に出られるなんて。
私はニヤつく顔を引き締めながら竹刀を握った。
そうだ。渉に自慢しよっと。
渉にとって試合に出させてもらうなんて1年の頃から当たり前すぎてなんとも無いことだろうけど。
私は3年目でようやく、だ。
嬉しい。
私は満足気に笑ってバッグから本を取り出した。
そのとき、1年生の後輩が私の肩を叩いた。
「・・・なに？」

「あ、あの、すみません。入り口で若菜先輩に用があるって人が・・・・」
武道場の入り口には、バスケ部のジャージを着た渉がうつむいて立っていた。
「・・・・・なんだろ。忘れ物でもしたのかな。」
私はそうつぶやきながら一応図書室の鍵をポケットに入れて立ち上がった。
そして入り口へ小走りで向かう。
「渉？なに？」
「あ、の、ごめん。練習中に。」
「いや。ちょうど休憩だったから大丈夫だよ。で？なに？図書室に忘れ物？」
「・・・・・あ、あぁ。」
渉は顔を赤くして言った。
「顔赤いよ？ね、何忘れたの？？」
私はニヤニヤして言う。
「・・・・バーカ。・・・・・ペンケースだよ。」
「ペンケース？・・・・ふぅん。あ、はい。鍵。明日の朝までに返してもらえれば大丈夫だから。」
そういって私はポケットから図書室の鍵を出す。
「・・・ありがとな。」
渉は私の手から鍵を奪う。
そして私は「じゃあね」とつぶやいて渉に背を向けた。
その瞬間。
渉の手が私の肩に触れた。
「ん？」
私は何だろうと思いながら振り返る。
「なに？」
返事の代わりに、渉は涙目で私の目をじぃっと見つめた。
「え、ちょっと、どうしたの？」

しかし渉は何も言わない。
もうこぼれそうなくらいの涙を目にためて、私を見つめる。
私の肩に触れた渉の手は、震えていた。
そして渉はやっと口を開いた。
「・・・しょに・・・て。」
声をしぼってやっと出したその言葉が、『一緒に来て』という内容だと理解するのに数秒かかった。
図書室に一緒に来て、ということなのだろうか。
もしかして、怖いのかな？
だとしたら相当可愛いぞ。
そう思った途端、渉の涙目の顔が急に愛おしくなってきた。
子犬みたいに可愛い。
私がそんな変な回想をしている間、渉の目には涙がどんどんたまっていた。
瞬きでもしたらこぼれてしまうだろう。
すると渉は「行くぞ」とつぶやいて私の肩に置いた手をさげた。
そして私に背を向けて、ジャージの袖で涙をぬぐい、歩き出した。
「ちょっと、待ってよ。」
私は小走りで追いつくと、渉の顔を覗き込んだ。
すると渉は目を大きく見開いて、涙目を見られたのが恥ずかしかったのか、顔を赤くし、目をそらした。
なにこの子。可愛いじゃない。
私は笑って図書室に向かって走り出した。
「どっちが早くつくか、競争だよ。」
「・・・はッ？」
渉は驚いた上ずった声で私を見る。
そして笑いながら「渉様に宣戦布告とは良い度胸だな。」と言いながら走り出した。
うん。いつもの渉だ。

奇跡

若菜って鈍感だ。
普通異性が顔赤くしてうつむいたら告白の雰囲気だって察するだろうが。
それが正常な中学生の感性だろうが。
まぁ言い出せなかった俺も悪いが。
俺は顔に感じる風を心地よく感じながら校庭を見た。
「ねぇ、渉？ペンケースとったら早く帰ろうよぉ。」
若菜は剣道の道義を手に持ったまま図書室の入り口に立っている。
階段を全速力で駆け上がったせいか、肩がまだかすかに揺れていた。
俺はというとペンケースを探すといいながらも、図書室の窓を開けて外を眺めている。
「もう！渉。」
そして見かねた若菜が俺の首をひんやりとした手で触ってきた。
「わぁっ。やめろって！くすぐったいだろ！っつかお前手冷たっ！」
俺はそう言いながらも若菜が触れた部分はもう一生洗わない、と心に決める。
「貧血だからしょうがないでしょ。。。。」
嘆くようにそういう若菜も可愛くて、お前最高に可愛い！、という言葉を飲み込む。
「ねぇ！渉！早く帰ろうよ！」
「はいはい。」
俺は校庭を眺めながら生返事をする。
若菜はどういう男子が好きなのだろうか。
ドＳで俺様な男子？
シャイな草食系な男子？
可愛くて守ってあげたくなるような男子？
それとも頼りになるお兄ちゃんみたいな男子？

俺は一生分の勇気を振り絞って言ってみた。
「お前さ、好きな人いないの？」
もちろん校庭を見ながら。
若菜の顔を直視しながらそんなこと言えるはずが無い。
だから若菜がどんな顔をしたのか分からない。
でも、声はいつもと同じで、淡々としていた。
「いないなぁ。」
俺はそう言った若菜の顔をみる。
普通男子にこう言うこと聞かれたら『えっ。まさか渉が私のことを？』なんて思っちゃったりして、顔が赤くなったりするものだと思うのだが、若菜はそんなこと勘づくこともなく、真顔で爪をいじっていた。
そして若菜は不思議そうに顔をあげた。
「……なんで見るの。」
「いや。若菜可愛いな、って思って。」
世界が凍った。
俺は自分の自爆行為に顔が爆発しそうなくらい赤くなり、恥ずかしさで気絶しそうだった。
「……ありがと。」
しかしそんな俺の自爆行為に全く勘づかない若菜は先生に「テストよく頑張ったね。」と褒められた時のような顔を見せた。
笑ったら良いのか、謙虚になったら良いのか、対応に困っているような顔で俺を見てくる。
「あの、だからさ！」
俺は少しイラついて若菜の右手で髪をなでる。
若菜は困った笑顔で俺を見た。
そんな顔がキュンとくるほど可愛くて俺は身悶えする。
そしてそんな感情に後押しされながら、俺は若菜の肩をぎゅっと抱きしめた。
「きゃっ。」

若菜は驚いたように高い声を発する。
「お前、良いにおいする。」
俺は自分の人格が変わったように思えた。
若菜の前だと自分の気持ちすらハッキリと言えない俺が、若菜を抱きしめた今、思ったこと、考えたこと、感じたことを素直に言葉に表せるような、そんな気がした。
でも、胸の鼓動はいつもの１００倍速く動いていて。
俺はそんなドキドキを若菜に感じられていると思うとますます顔が赤くなった。
さらに、ほんの少し若菜の胸の鼓動を感じる。
俺は耐えられなくなってより強く若菜を抱きしめた。
「……渉。苦しいよぉ。」
男子中学生の力は強い。
俺は自分では意識しないうちにかなりの力で若菜を締め付けていたらしい。
「……ごめん。」
俺は若菜の肩から手を離し、一歩後退した。
若菜は今までみたことがないほど真っ赤な顔で、うつむいていた。
「渉のバカ。」
そういって若菜は床に落ちた道義を睨む。
「バカ！」
すると若菜は、俺の首に抱きついてきた。
「えっ。ちょっ。」
俺は嬉しいような困ったような声を出す。
すると若菜は言う。
「渉温かいよぉ。」
そして俺の胸に顔をうずめていた。
俺は嬉しさと驚きで気絶しそうになり、やっとのことで若菜の背中に手を回した。
若菜にそんなことを言ってもらえることが夢みたいに嬉しくて、俺

は奇跡が起きた、もう死んでも良いと本気で思った。

若菜の恋

私に今まで感じたことの無い感情が芽生えていることに気がついた。
渉の温かい胸に顔をうずめていると、胸がドキドキした。
壊れちゃいそうなくらい鼓動が激しくて、渉にそれが知られることが恥ずかしかった。
そして気がついた。
これが、恋、なんだ。
私はなるほど。という気持ちで渉の顔を見上げた。
顔を見るだけでドキドキが止まらない。
どうしよう。
私も渉に夢中になっちゃうのかな。
多くの女子が渉に恋している理由が分かった気がする。
なんか、渉、格好いいよぉ。
今、初めて。人生で初めて恋に落ちて分かった。
いや、もしかしたら。
もしかしたらずっと前から私は渉に恋をしていたのかもしれない。
それは自分でも気づかないほど小さくて。
でもずっと昔からあって。
そうだ。
図書委員の顔合わせ会の時から、私は渉に恋をしていた。
1年生の時。
カチャカチャと芯を出そうと頑張っている渉の横顔を思い出した。
そして、そんな一生懸命な渉に、一本の芯を差し出したのを思い出した。
『ありがとう』と、小声で、でも気持ちのこもったお礼を言われたことを思い出した。
ピリっと心臓が痛くなって、ドキっという音が聞こえた。
自分は好きな人なんていない、なんて言いながら、ずっと好きだっ

たんだ。私。
ずっと渉のことを見ていたんだ。
渉が誰かに告白されているのも。
『好きな人がいるから』って断っているのも。
フられた女子には悪いけど、少し、安心していた自分がいた。
そして好きな人がいるということに悲しみを感じていた自分がいた。
胸が痛くなっていた自分がいた。
今思えば、アレは給食食べ過ぎたから、とか、胃の調子が悪いから、とか、そんなんじゃなくて。
『恋』だったんだ。
私は自分に嘘をついていた。
「渉。」
私は渉の顔を見上げながら言う。
「ん？」
「好きな人って、誰なの？」
私は聞いた。
渉が告白を断る時の口ぐせ。『好きな人がいるから。』
その好きな人を、誰なのか教えてもらう権利が、私にはある。
だって私は渉のことが好きだから。
好きだって気づいてしまったから。
すると渉は困ったように微笑んで言った。
「あぁ～あ。どぉせ鈍感若菜は気づいてないんだろうな。」
「もう。ちゃんと言ってよ。…誰だろう。」
私は全く検討が付かなかったので、学年の可愛い女子を頭の中で網羅させた。
「陽菜ちゃん？」
「論外だな。それに俺そいつに告られてフったし。」
「そっか……じゃあ夏美ちゃん？」
「違う。そいつもフった。」
「渉どんだけ告られてるんだよぉ。モテモテだね。」

私は自分で言った言葉に少し傷ついて、でも平常を装った。
でも渉はいつもと違う私の様子に勘づいたのか、不思議そうな目で私を見る。
「……若菜……お前……」
「な、なんでもないよ！えぇと、渉っ……！？」
次の瞬間、私は渉の力で強引に壁に押し付けられた。
「……渉？……ごめん。」
私は何か悪いことでも言ってしまったのかと思って、渉を怒らせてしまったのだと思って、焦って、ただ。
ごめん、とつぶやいた。
私をみつめる渉の目はさっきの涙目で可愛かったものなんかよりもずっとステキで、格好よくって、大人びていた。
次の瞬間、渉は壁に押しあてた私の肩から手を離し、私の唇に触れた。
私は文字通り目と鼻の先で渉の顔を見た。
キレイな顔だな。と、思った。

ラスト

俺は、とにかく若菜に嫌われないように、この3年間を過ごしてきた。
でも、もうどうにでもなれ。
嫌われるくらいで若菜のファーストキスを奪えるのなら、儲け物かもしれない。
そう思って、若菜の濡れた唇を触る。
すごく可愛い。
俺だけのものにしたい。
「若菜、好きだよ。」
「嘘・・・・・・・・・」
嘘なんかじゃない。
ドキドキして、悲しくなるくらい若菜が好きで。大好きで。
若菜さえいればもう何もいらないくらい好きで。
その、可愛い笑顔を、唇を、俺だけのものにしたくて。
だから俺はそっと、唇を重ねた。
「・・・っ」
俺自身ファーストキスだったからキスの仕方なんて知らない。
だけど2人きりの図書室で大好きな人とするキスは、最高に甘くて、青春で。
俺は夢中になって若菜を抱きしめた。
するとさっきよりも強い鼓動が若菜から伝わってきて、嬉しくなって、それで、俺はたまらなくコイツが好きなんだ、と今更ながらも強く、そう実感した。
若菜からの拒絶はない。
それだけでも嬉しかった。
若菜は目を閉じて俺のジャージを強く握ってきた。
涙がこぼれるくらいに、情けないくらいに、嬉しかった。

俺は若菜を誰にも渡すまいと、さらに、強く、優しく、若菜を抱きしめた。
その時、開けっ放しだった図書室の前の廊下を、俺たちの担任の先生が通った。
４０代前半の男の先生で、歳の割に髪が少ないことから、『ハゲ』と呼ばれている。
俺はその先生と目が合い、「ヤベぇ」と思いながら若菜から離れた。
若菜は驚いて、でも状況を把握して先生の方を向く。
怒られるのを覚悟で、うつむいた。
すると先生は「ほどほどにな。」と笑って通り過ぎていった。
俺はなんとなく嬉しくなって、笑った。
若菜も笑った。
可愛い笑顔だ。
そして俺は余韻に浸りながら言った。
「ごめん。キス、しちゃって。」
「・・・いいよ。」
「あと、俺、マジだから。マジでお前のこと、ずっと好きだったから。鈍感なお前のことだから、全く気づいていなかっただろうけど、好きだから。大好きだから。鈍感若菜にはハッキリ言わないと伝わらないって分かったよ。だから、何度でも言うよ。若菜、大好きだ。愛してる。」
勢いで言った。
言った後は、スッキリとした爽快な気分だけが残った。
言い切った。
あとはフラれるだけだ。
俺は覚悟して目をつぶった。
「バカ。渉のバカ。人のこと鈍感鈍感って。鈍感は渉の方だよ。私だって渉のこと好きなんだからね。」
「へ？」
俺は若菜の言う意味がよく分からなくて、頭が真っ白になった。

「……それは遠回しに断ってる……ってこと？」
「は？？もう！頭大丈夫ですか？……もうっ」
そういいながら、若菜は精一杯背伸びして、俺の唇をちょんっと奪った。
俺は間抜けな顔で若菜を見つめて、そしてやっと意味が分かった。
あ、俺、もしかして恋実っちゃったのか。
「好きだよ。」
俺は試しに言ってみる。
「私も。渉大好き。」
若菜が少し頬を赤らめて言うその姿は、俺が１５年の人生で見たどんなものよりも美しかった。
そしたら急に喜びが溢れてきて、気づいたら俺はガッツポーズをしていた。
「よっしゃぁあああああああ！」
「もうっ。渉！大好きっ！」
そういって若菜は俺に抱きついてくる。
「ふぇっ！……あ……」
ふいをつかれた俺は驚いて若菜の胸を掴んでしまった。
あわてて手をひっこめるが、ぷにっとした生々しい感触が手に残る。
「…ごめん。」
急に気まづくなって、俺は顔を火照らせた。
「……渉の変態。」
そういって若菜は口をとがらせて、でも少し嬉しそうに言った。
そして時計を見て慌てた。
「あっ。ヤバい。怒られる！」
俺も夢見心地から目が冷めて言う。
「ヤッバ。」
「あ！！そういえばね、私今度の試合出られるんだよ！」
「へぇ。すごいじゃん。良くやったな。」
俺は嬉しそうに言う若菜の髪をそっとなでた。

「じゃあ、ご褒美に明後日のバスケ部の試合に招待してやろう。」
「ん？」
「１０時から体育館でやるからさ。俺の３pシュート見てろよ。」
「……うん！」
「じゃ、体育館まで競争な。」
「えっ。ちょっと待ってよぉ。」
「よーい……スタート！」
俺は若菜の笑顔を見ながら廊下を走る。
幸せな時間は、始まったばかりだ。

ラスト（後書き）

最後まで読んで下さってありがとうございます。
ドキドキしてしまうような小説を書きたいと思い、書きました。
次作は、もっとドキドキできるように、頑張ります。
少なくとも、1作目の『片想いの切なさ』よりはドキドキしてもらえました・・・・・よね？？
ではまた次作でお会いしましょう。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1274l/

１５歳の初恋

2010年10月13日16時38分発行